進を認めた。うちRasのアイソフォームのうちH-Ras蛋白が検討した12症例中9例に活性亢進を認めた。腎細胞癌のFTIへの効果を腎癌細胞株で検討した。Ras活性の強い細胞株でFTIによる増殖抑制を認めた。

【考察】腎細胞癌においてRas蛋白は癌化に関連していると思われた。FTIは腎細胞癌の治療に有用ではないかと思われた。

14. 腎細胞癌におけるMMP活性の検討

神谷直人，中津裕臣，直井牧人
関山和弥，鈴木規之，田中方士
村上信乃　（旭中央）

【目的】癌細胞の浸潤・転移には基底膜の破壊，extracellular matrix（ECM）の分解が必須であり，主にmatrix metalloproteinase（MMP）がその重要な役割を担っている。腎細胞癌における，gelatinolytic activityを，最近開発されたFilm *in situ* zymography（FIZ）を用いて検索し，その臨床的意義について検討した。

【方法】51例の腎細胞癌組織・10例の正常腎組織においてFIZを施行し，gelatinolytic activityを4分類した。gelatin zymography（ZG）のgelatinolytic activityをdensitometerを用いて定量し，FIZの分類との相関を検討した。またFIZで分類した各々の群においてWestern blot, RT-PCRを施行し，MMP-2・MMP-9の発現を確認した。また各種臨床パラメータとgelatinolytic activityを比較検討した。

【結果】FIZでは腎細胞癌組織・正常腎組織いずれにおいてもgelatinolytic activityを認めた。腎細胞癌組織では正常腎組織と比較して強いgelatinolytic activityを認めた。腫瘍最大径が大きい例・核異型度の高度な例・静脈浸潤を有する例では強いgelatinolytic activityを認めた（$P<0.05$）。転移例・死亡例では，有意差は認められなかったが，強いgelatinolytic activityを認めた（8/11・5/6）。

ZGでは，腎細胞癌組織51例中全例においてMMP-2・pro MMP-2・pro MMP-9の発現を認めたが，MMP-9は4例でのみ発現を認めた。ZGにおけるMMP activityをdensitometerにて定量したところ，FIZのgelatinolytic activityはMMP-2と有意な相関を認めた（$P<005$）。

MMP-2・MMP-9の発現は，Western blot・RT-PCRにて確認された。

【考察】腎細胞癌の進行・静脈浸潤にはMMP-2が強く関与していることが示唆された。また，腎細胞癌におけるFIZは腫瘍径・核異型度・静脈浸潤と相関することが示された。

15. PCR-LOH法による両側腎細胞の発生起源に関する検討

木藤宏樹（熊谷総合）

腎細胞癌の1－4％に両側発生のあることが報告されているが，その発生起源に関しては不明である。今回我々は異時性両側腎細胞癌5例，同時発生両側腎細胞癌3例を対象とし手術標本の正常部および腫瘍部より抽出したDNAを用いて3p，6q，8p，9p，14q上のマイクロサテライトマーカーを用いたPCR-LOH解析を行った。その結果から，異時性の場合は，転移としての発生で，同時性の場合は多源性であることが示唆された。

16. アダカラムの使用経験

溝口研一（千大）

肺転移病巣を伴う末期腎癌患者に対し，アダカラムを用いた体外循環顆粒球除去療法を試みた。治療の目的は患者QOLの改善および抗腫瘍効果の検討である。方法は1日1回60分アダカラムにて血液浄化を5日間連続して施行した。翌日より01F500万単位の週3回投与を施行した。アダカラム治療前後で患者QOLの著明な改善は認められなかった。血液検査上顆粒球/リンパ球比の低下は認められた。抗腫瘍効果はIAP上変化なしCT検査は未検であった。アダカラム療法中明らかな副作用は認められなかった。さらに症例を追加し本療法の効果につき検討が必要と思われた。

17. 腎癌腫瘍浸潤リンパ球サブセットと予後

五十嵐辰男（千大）

【目的】1．インターフェロン療法有効症例の予測，2．予後からみたリンパ球サブセットの意義の検討。

【対象・方法】腎摘除術を施行した腎癌症例79例を対象とし，2-color flow cytometryを用いてリンパ球サブセットを解析し，生存期間，インターフェロンの効果と比較検討した。

【結果】進行癌症例では，腫瘍浸潤リンパ球サブセットのCD4/CD8比が高いものの予後が良く，インターフェロンも奏効していた。

【結論】CD4/CD8比は，予後因子であり，インターフェロンの効果も予測できることが示唆された。

18. 済生会習志野病院における自己血貯血の現状

三上和男，関田信之（済生会習志野）

平成14年4月から12月までの8ケ月間に38例の症例で術前自己血貯血をおこなった。38例の症例中2例で